

# 月の鏡

P.M.FF

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

G O D E A T E R 1と2の2次創作小説です

オリジナルキャラ、原作改変、死亡キャラ生存…

など含みます

以上を踏まえた上で

お読み頂くかどうかお決め下さい

9話	8話	7話	6話	5話	4話	3話	2話	1話
42	37	31	26	21	16	11	5	1

目次

# 1話

? 「:ヨウ:、リ:…」

遠くから聞こえるような声

どこか落ち着く、聴き馴染んだ覚えのあるその声に  
返事をしようと試みる

? 「:きて:リヨ:」

だが言葉にはならなかったようで

先程の声は少し近づいたような気がする

リヨウ「:ん、んう:」

口が動かない

自分の身体なのに自由が効かない

不思議な感覚に抗おうともがく

? 「リヨウ、起きないとイタズラしますよ?」

先程の声が今度はハッキリ耳元で聞こえ

同時に頬に触れられた手の感覚と共にパツチリと目が開いた

? 「あ、起きた?」

すぐ傍から覗き込む彼女の顔は先の言葉とは裏腹に

落ち着いた微笑みを浮かべていた

リヨウ「:うん、起きた:起きたからさ、退いて?」

ボクに覆い被さっている彼女に

寝起き特有の気だるげな声で言うと

彼女は軽く首を傾げるだけ

溜め息混じりに身動き

手は抑えられていた訳ではなかったのだ

軽く彼女の肩を押すとようやく身体の上から退いてくれた

? 「ん? あらら? なんだかいつもと変わらない?」

リヨウ「いや変わらないっていつも通りじゃん」

首を傾げつつ不思議そうな声をあげる彼女、浅羽 ルナに

ボクは呆れた声をかける

リヨウ「むしろ毎回言ってるけど、起こすなら普通に肩を揺らすとか叩くとか出来ないの？」  
ボクがルナに起こされる時はいつも先程のように覆い被されて声をかけられるだけ  
正直に言つて朝に弱いボクには少し足りない…というかイマイチしつかり起きれないし  
何よりちよつと、いやかなり恥ずかしい  
ルナ「いつも言ってますがこれもリヨウの為なのです」  
そんな複雑なボクの心境は気にもかけず  
ルナは涼し気な表情でのたまう  
曰く、年頃の女の子が寝込みを襲われた時の対処法らしい正直、聞き飽きたし  
何より想定するにはあまりに現実味のない事態だし後、ちよつと早くない？ボクまだ13歳ですが…  
胸もまだ平坦だし  
身長もまだ140と少しだ  
もちろんこれから先  
成長と共にナイスバディな女性になるとしてもいささか性急過ぎると思う  
ルナ「何を言いますか！」  
世の男達の野獣ぶりを舐めてはいけません  
中でもロリコンと呼ばれるそれはもう恐ろしい人種は今のリヨウのようにツルペタミニマム可愛い娘が…  
ついた!?!」  
早口にまくし立てるルナの顔にグーパンチ  
誰がツルペタミニマムじゃい  
まだつってんだろが  
そう、ボクには未来がありアンタとは違う<sup>17歳</sup>  
全く失礼な…  
ルナ「イタタタ…もう乱暴な娘に育ってしまつて…  
誰に似てしまったのでしょうか…？」

アンタじゃないことは確かだよ

なんて思いながら睨みつけていると

ルナは気を取り直したように話を続ける

ルナ「それに今日はいつもと違うんですよ？」

乙女なら喜ぶシチュエーション：床ドンですよ？」

なにそれ？

ルナ「昨日読んだ少女漫画にあったのです

ちよつと悪めな男の子と先程のような体勢で密着した少女は

それはそれは可愛いお顔でした…」

思い出しながら話しているのだろう

ウツトリした吐息を漏らしつつ

ルナ「という訳で年頃乙女なりヨウに

トキメキをプレゼントしてあげようという

朝から気の利いたこのステキなお姉さんに

いつそ惚れてしまっても良いのですよ？」

要らねえし、惚れねえし

リヨウ「というか、ルナ

それは異性にされるとドキツとするシチュであった

ルナにされても別に何も感じないというか…」

そういえばその漫画読んだな…

とか思い出しつつ突っ込むと

キョトンと首を傾げるルナ

ルナ「男にされたら普通に気持ち悪いですけど？」

こ<sup>レ</sup>う<sup>ス</sup>いう女だった

リヨウ「いやアンタはそうでも世の女性は違うでしょうが

後、何度も言うけどルナにされてもいつも通りだから

トキメキどころか飽き飽きなんだって」

ルナ「上手いこと韻を：じゃなくて

まさか日頃から少女漫画シチュを実施出来ていたとは…

我ながらびつくりしました…

お姉さんモテモテだったんですね」

ねーよ

ルナ「それにいつも通りに感じるということとは  
リヨウが男に床ドンされてもときめかないということでは…  
つまり結果的に男除け出来ているのでは…

うん、お姉さん安心です」

なんか自己完結してるけど…ま、いいや

リヨウ「それより、着替えるから…」

ルナ「あ、はいはい

お手伝いですねっ？」

笑顔で手をワキワキさせんな！

つてな感じで部屋から蹴り出した

これがボクの日常的な朝です

## 2話

西暦2050年を過ぎた頃から

世界には異形の化け物達が現れ始め

人類は衰退の道を進み始める

極東の旧国、日本に伝わる八百万の神に因み

『アラガミ』と名付けられた怪物

あらゆる物質を喰らい、様々な形態・異能を備えながら

今もなお進化し続けているこの化け物達に抗う為

アラガミを構成するオラクル細胞の研究を進めていた企業

『フェンリル』により唯一の対抗手段が発見された

オラクル細胞を人間に取り込ませ

同じくオラクル細胞を使い作られた武器『神機』を操る

『GOD EATER』の活躍

世界各地に作られた支部と呼ばれる基地の周囲に

生存者を集め構築された狭い居住区とそれらを覆う隔壁

対アラガミ装甲壁で守られた世界に点在する拠点に籠り

かろうじて滅亡を免れている現状を打破すべく

旧日本に位置する、現在では極東支部と呼ばれる場所で

アラガミの侵攻にも耐えうる最後の砦

通称『エイジス計画』が進んでいる…

ルナ「らしいわ」

リヨウ「いや、らしいってそんな…」

物凄い棒読みな朗読の最後に付け足された

あつけらかなとした物言いに思わず突っ込む

リヨウ「そのエイジス計画の手助け？にルナは行くって話？」

ルナ「いいえ？」

ただのGOD EATERが1人入ったところで進む計画な訳な

いし

純粹なお仕事ですよ、お仕事」

溜め息混じりの突っ込みにもルナは全くペースを乱さない  
淡々とした口調のまま手に持つ資料をペラペラと弄んでいる  
リヨウ「いや、まあボクの言い方も大袈裟だったけどさ  
いつも通りの出張に出る話で良いんだよね？」  
こう見えてルナはフェンリル本部所属のGOD EATERであ  
る

世界各地に点在する支部に属するGOD EATERと違い  
本部所属の彼女は一箇所に留まらず  
各支部を飛び回っているのが常だ  
アラガミは常に進化する生物なので  
どの地域でもパターンとか法則と言ったものが見つけにくく  
対処が難しいことに加えて深刻な人材不足も重なり  
本部所属のGOD EATERはルナ曰く便利屋的な扱いらしい  
ここ半年程は珍しく出張がなく  
本部での仕事が集中していたので  
一緒に過ごせていただけで  
ちよつとした休暇のような物だったと言える  
かくいうボクはGOD EATERではない  
一応、適性はあるのだがボクに適合出来る神機が現状無くて  
日々、オペレーター・整備士・その他諸々の勉強をする毎日だ  
ぶつちやけ扶養されている身なので肩身が狭いのだが  
若いことに加え現場に出れない今やれることは  
幅広い知識と叶うなら技術を身に付けるようにと  
この姉代わり<sup>ルナ</sup>を始めとした  
周りの大人達から言われている  
つまりは、ルナが仕事に行っている間  
ボクの仕事はお留守番になるのが常…だったが  
ルナ「出張というよりは転勤ね」  
という言葉にボクは固まった  
いや、いつかは起こりうる話だとは思っていた  
各支部を転々としつつ戦い続け

生還しているルナの実力ならば

現状、最前線と呼ばれ

人類にとって重要な拠点極東支部に派遣されるのは

当然の帰結と言えるし

長く留まるなら転属させた方が都合がいいことくらい

素人のボクにも分かる話だ

リヨウ「寂しくなるね…」

別に今生の別れではないのかもしれない

これまでだって1年365日中300日は離れて暮らしていた

それでも家族のような彼女が居なくなるのは

やはり寂しかった

ルナ「え？なんで？」

ボクの落ち込んだ言葉を吹き飛ばすような

それは見事な？マークを浮かべたルナの表情に再度固まる

え？いやだって…ルナと離れ離れ…

いや確かに、これまでも似たような感じだったけど

って言うか、死なない限り再会だって出来るとは思うけど

ルナ「極東行くの、イヤ？」

イヤとかそういうのじゃなくて…ん？

なんかニユアンスが…

リヨウ「え？ルナは極東に行くんだよね？」

ルナ「うん、行くよ？リヨウと一緒に」

リヨウ「ボクも？」

え？なんで？

ルナ「可愛い妹が居ない生活は

お姉さん耐えられません」

答えになつてないんですけど

いやそれ以前に、口に出してない言葉に返事すんな

ルナ「お姉さんですからね」

だから答えに…口に出して…ちよつとタイム

からかい過ぎちやつたらしい

目をグルグルさせながら一生懸命考え込むリヨウの姿を眺め  
口元が緩むのを感じながらワタシは考え込む

ワタシ自身も極東行きは覚悟していた

というか確信していたし

なんなら予想していたより遅かったなと感じる程には

今回の異動に驚きはなかった

来るべき時が来たのだと落ち着いて受け止めている

懸念していたのはリヨウを連れて行く事が出来るかどうか

いずれ極東に帰ることになれば

何としても一緒にと決めていた

これまでの出張に比べれば長丁場な仕事である事に加え

あちらで自分が抱えるであろう諸々を考えれば

リヨウの同行には骨を折る必要があるだろう

という予想に反し

あつさり許可されたのはむしろ僥倖だとも思えた

こんな所<sup>本部</sup>にリヨウを置いて行きたくなかったし

先々のことを考えれば極東の方が色々都合がいいはずだから  
生まれ故郷<sup>東</sup>で今も戦う先輩方を思い浮かべ

初めてリヨウに出会った頃を思い出す

4年前、丁度今のリヨウと同じ歳だったか

ワタシがまだ新人と呼ばれていた頃の記憶

緊急のミッションだと駆け付けた先は地獄のようだった

赤黒い血溜まりが無数に広がり

辺りに飛び散る人の欠片

それらを生み出したアラガミ<sup>元凶</sup>達に囲まれた

子供の姿を見た瞬間、無我夢中に神機を振り回し駆け出した

気が付けば、人形のように生気のないリヨウを抱き抱えながら

共に出撃した先輩方に多大なお叱<sup>賞</sup>りを受ける自分

行き場も居場所も失った彼女を引き取るのは

非常に面倒な悶着があったが

最終的にはワタシの希望通りになった

「助けた責任の取り方は分かるな？馬鹿者め」

「お前さんの挙げた戦果だ、誰も奪えやしない」

先輩方のお陰でもあったなと思いついていると

リヨウ「ルナ？」

可愛い妹の呼び声で思い出の扉がゆつくりと閉じられる

ルナ「なんででしょう？」

リヨウ「ボクも着いていくのは分かったけど…荷物とかは？」

ああ、そうでした

別に急ぐ必要はないですけど

早いに越したことはありませんね

ルナ「ゆつくり準備しましょうか

出立は1週間後の予定ですから」

分かった、と小さく頷き立ち上がるリヨウと共に

ワタシもやるべきことを思い出す

手頃なカバンを探して棚を漁るリヨウの背後

衣装箆笥の引き出しを開けて荷造りのお手伝いを始めようとして

ルナ「リヨウ…大変です」

ワタシは深刻な事態に気付いた

がさごそと棚を漁る手を止めたりヨウにゆつくり振り返り告げる

ルナ「先に買い物に出しましょう、事は急を要します」

幸い、今日は午後からの予定はない

え？何を買いに？と首を傾げるリヨウは

この緊急事態に気付いていないらしい

ルナ「リヨウ…」

ワタシは先程開けた棚からある物を手に取り告げる

ルナ「急ぎ下着を買いましょう…！」

スポーツブラしかないなんて思いもしませんでした

機能性は大事ですがそれが全てではありません

お姉さんが全身全霊を持って選んだ逸品を着せてあげ…」

瞬間、鼻っ面に感じた衝撃と遅れて襲いかかる後頭部の痛みに  
ワタシは珍しく混乱し状況把握が出来なかった  
ワタシの手に握られていたブラをひったくりながら  
乱暴に胸倉を捕み引き起こす手はやや赤みを帯びており  
至近距離から顔を覗き込むそれは真っ赤な表情に  
ようやく殴られたことを理解した瞬間  
リヨウ「ルナ：そんなことより大事な要件が出来たよ」  
静かな、だけど迫力のある声に思わず息を飲んだ

その日、2人は買い物に出ることはなく  
彼女らの部屋からはそれはそれは大きな怒鳴り声に混じり  
何か固いものを壁にぶつけるような音が時折  
それは日が沈むまで続いたそうだ

### 3話

極東行きを告げられて2日が過ぎた

ルナは呼び出しやらミーティングやら

色々やるべきことがあつて忙しくしているが

ボクの方は特に何も変わらなかった

ルナ経由で紹介された家庭教師に

今まで教わってきた内容の見直しと

これから訪れる極東について簡単な予習をして貰いながら

引越しの為の荷造りを進めるだけだ

リヨウ「今日もありがとうございました」

本日の勉強も終わり玄関先で家庭教師を見送る

今日の予定は打ち合わせに出ているルナが戻ったら

買い物に出かけることになっている

下着じゃないよ？

アレだけお説教したにも関わらず

あの変態ルナはまだなんか言っていたが

引越すにあたりいくつか必要な物もあつたのでそれらの買い出

し

これから大きくなるのだし

一応、G O D E A T E Rとして現場に出る日も来る…かも知れな

い

女の子としては多少お洒落に興味が無いわけじゃないけど

派手な物を身に付けるよりは

必要最低限に絞り機能性を意識した方が良いと思う

決して小さいから似合わないとかは思っていない

ホントだよ？

なんて誰に言う訳でもない考え事をしてしていると

来客を知らせる呼び鈴が鳴った

先生が忘れ物でもしたのかと扉を開けると

高級そうなスーツを着たダンディなおじ様が居た？「やあ、突然すまないね

君がルナ嬢の妹君、加賀美 リヨウさん…かな？」

明らかにエリートというか高貴そうな方だけど  
気さくな感じで話しかけられた

リヨウ「はい、そうですが…姉に御用ですか？」

今、彼女は不在でして…えと」

？「ああ、ルナ嬢から聞いているよ

直に戻るから先に部屋へ向かっていてくれ…とね」

明らかに目上の人を留守の自宅で待たせるって…

礼儀的にどうなの？

我が姉ながら呆れそうになるが

こちらのおじ様は気にした様子も無く

「上がらせて貰っても構わないかね？」

とか、笑顔で聞いてくる

慌てて招き入れてひとまずリビングに案内する

お金持ちそうな方をこんなマンションの1室に通すのに

なんか申し訳なさを感じながらひとまず紅茶を淹れる

おじ様は気にした様子も無く

「お構いなく」とか言ってるけど

お客様だし、招き主は不在だし

頑張っておもてなししなくては

リヨウ「安物で、申し訳ありませんが…」

出来る限り失礼のないように心掛けてカップを差し出すと

？「いい香りだね、それに手際も良い

まだ若いだろうにしっかりとっているんだね」

と、これまた穏やかな笑顔で褒めて貰えた

凄いいい人だと思いき感心半分

ルナとはどういう関係なんだろうかとふと気になった

素敵なおじ様だし、部屋に招くほどのだから

余程、親しい関係なのだろうか

恋人、或いは婚約者か？なんて思いかけたが  
すぐに有り得ないと分かる

何故ならルナだからだ

あの女の性癖はよく知っている

一応、彼女の名誉の為に言っておくが決して男嫌いとかではない  
仕事の関係でも親しい男性は居るし

何人かは紹介もされた事がある

見た目は良いし、彼女の友人達からは

周りからモテていると聞いた覚えもある

という事はおじ様からの片想いか？

仮にこのおじ様からアプローチを受けたとすれば

大変なことになりうるぞ：と思わず身震いしながら

よく見るとおじ様の左薬指には指輪が嵌っていたことに

思わず安心してしまった

？「どうかしたかね？」

おつと顔に出ていたらしい

リヨウ「いえ、なんでもありません：えつと」

そう言えば名前を聞いてなかったことに気付いた

リヨウ「失礼ですが、お名前を伺ってもよろしいですか？」

礼儀作法も色々な人に教わってきたが

目上の、しかもお金持ちそうな方相手だとやはり緊張する

？「おつと、すまない：失念していた」

おじ様はそう言いながら

スーツの胸ポケットから名刺を取り出しながら

「私はエルンスト、エルンスト・デア・フォーゲルバイデ

挨拶が遅れてしまって申し訳ない」

フォーゲルバイデ？どこかで聞いたことあるような：

ルナ「ただいまー、エルンストさん来てるー？」

なんか絶妙なのか微妙なのかと分からないタイミングで

ルナが帰ってきました

エル「ルナ嬢、お疲れ様」

ルナ「お久しぶりです、お待たせしまい申し訳ありません」  
にこやかに出迎えるエルンストさんと

丁寧な所作で頭を下げるルナ

エル「いや、こちらこそ急な訪問ですまないね」

ルナ「それこそ、お気になさらず」

フォーゲルバイデ財閥の社長ともなれば

スケジュールも詰まっていますでしょう」

ルナの応答を聞いて思い出した

今や旧国家群に代わる統治機構と言えるフェンリルだが  
前身は一企業ということもあって

その活動を支える資金の中には財閥や貴族といった

有志の寄付などが結構な割合になると言う

フォーゲルバイデ財閥は中でも

有数の株主のような立場にあると

以前、教えて貰ったのを思い出しながら

ルナも帰って来たしボクは下がるべきかと考えていると

ルナ「それと、遅ればせながら」

今回のことはお悔やみ申し上げます…」

彼女にしては珍しい、沈痛な面持ちで

深く頭を下げるルナに慌てて倣うように頭を下げる

エル「ああ：ありがとう」

そう言えばルナ嬢はあのバカ息子と共に…」

ルナ「はい、極東支部への所属期間は短かったです」

彼とは同期の間柄で、肩を並べて戦った仲でした…」

そっか：曖昧な記憶になるがボクを引き取った直後

あまり間を置かずルナは本部所属になったんだっけ

ルナと過ごすようになって4年になるが

ボクは彼女に引き取られる前後の記憶が非常に曖昧だ

でも、記憶を失った訳じゃない

臆気でも、両親や友人を失った時の光景は覚えているし

何より物心が付いてから暮らしていた

居場所・思い出を忘れたことはない

あ、やばい泣く…と慌てて部屋に戻ろうとした

ボクの手を掴んだのはルナだった

気付いた時にはその胸に顔を埋めるような形で抱き締められ

優しく頭を撫でられる感触

小さくとも確かに聞こえる彼女の鼓動

ボクはエルンストさんが居るのも忘れて

ルナに縋り付き泣いていた

## 4話

ひとしきり泣いた後、

ようやく来客エルンストの存在を思い出し慌てて謝罪する  
リヨウ「すみません…！」

お見苦しい所をお見せしてしまつて…」

しかし、エルンストさんは優しく微笑みながら

エル「いや、気にしなくていい

君の事情はルナ嬢から伺つた事がある

バカ息子からも聞いていたが、すまない

思い出させるつもりではなかつたのだが…」

申し訳なさそうに頭を下げられる

リヨウ「いえいえ、そんな…大丈夫ですから」

うわあどうしよう、エルンストさん優しいんだけど

なんて返したら良いのか分からず困っている所を

ルナ「ところで、詳しいご用件を伺つてませんでしたね」

という、ルナの落ち着いた声で空気が変わった

タイミングは良いと思う

礼儀的には良くないかもしれないけど

エル「ああ…そうだね

要らぬ世話…かもしれないのだが」

エルンストさんは少し眉を下げながらチラリとボクを見た

あ、席を外すべきだったのを忘れてた

未だにルナに抱き着いている現状を思い出し

再び恥ずかしい感情が湧き上がってきた

慌てて、ルナから離れ…おい離せルナ

なんだその「えー…（´・ω・´）」みたいな顔は

エルンストさんが話しくそうだろうが

ルナ「もうちよつと…ダメ？」

ダメに決まつてんだだろうが

少し強引にルナの腕を払い除けて立ち上がると

エルンストさんが慌てたように遮った

エル「違うんだ、席を外す必要はないよ

リヨウさんについての話だから」

はて？ボクの話？

思わずキョトンと首を傾げるボクの横で

ルナ「ああ…なるほど？」

と納得したように頷くルナを見つめる

とりあえず座りなさいと仕草で促されたので

ルナの隣の椅子を引き腰掛ける

ルナ「むう…」

いや、拗ねた声出すな

ぽんぽんと自分の膝を叩いていたけど

今は…つか普段でもアンタの膝には座らねえよ

エルンストさんは少し顔を綻ばせながらこちらを見ていた

エル「気を遣わなくてもいいんだよ？」

リヨウ「いえいえ、普段からそんなことしてませんから！

それにもう13歳です、子供じゃないんです」

ちよつと碎けた物言いになったがしつかりと否定する

エル「ああ、そうだね

もう立派なレディだ、失礼してしまった」

エルンストさんは一層笑みを深めていたが

軽く咳払いをして表情を改めた

エル「ルナ嬢には色々と助けて貰っていてね」

そう言えば、本部所属とは言え一介のGOD EATERが

こんな上役の人と繋がりがあるのは不思議だ

しかも、この姉<sup>ルナ</sup>バカとなると…なんだろう

エルンストさん、弱味でも握られているのかな

少しジト目になりながらルナを見やるが

ルナは涼しい顔でキョトンと首を傾げるだけ

エル「聞くとところによるとルナ嬢は

近々、極東支部に出向くそうだね

「それも長期間の任務になると聞いている」

真面目な話の途中にふざけてましたすみません

エル「その間、リヨウさんを置いて行くのは

色々心配もあるだろう

それで私に何か力になれることがあるかと思ってね」

えっと…どう言う意味だろう

少し困ってルナを見やるが彼女も真面目な表情で

こちらを見つめ返すだけだ

エル「ルナ嬢が不在の間、こちらでリヨウさんを預かるとか

或いは、この家で1人で暮らす援助をするのも手段だ」

あ、そういう事か

でもルナから聞く限りボクも極東に行くことになってるし

フェンリルの上司から許可もあるって言ってた

チラリとルナに目を向ける

彼女は先程と変わらず真面目な表情でこちらを見ていた

えっと…ボクから話せてことかな…

リヨウ「…エルンストさん、

お気遣いはとても有り難いのですが

ボクはルナと一緒に極東に行く予定ですから

お気持ちだけで十分です」

感謝の気持ちを込めて失礼のないように気をつけつつ断る

エルンストさんは少し驚いた様子でルナを見て

エル「そうなのかい？」

と、尋ねた

ルナもコクリと静かに頷きを返す

それを見て「そうか…」と呟くエルンストさん

エル「しかし…先程の様子を見るに

極東はリヨウさんにとっては色々複雑な場所だ

それでも大丈夫なのかい？」

ああ…凄いいい人だな、エルンストさん

多分、極東で失った息子エリックさんのこともあつて

余計に心配してしまっているんだろう

リヨウ「確かに、不安はあります

でもボクはルナと一緒に行きたいです」

ルナとボクは家族だ

許されるなら側に居たい気持ちがある

リヨウ「それに：ボクはまだ未熟ですが

それでもG O D E A T E Rの適性はあります

怖い気持ちはあります

でも、逃げたくないんです

ルナが：家族が戦っているのに

ボクだけ待っているのはイヤなんです」

すぐには無理だと分かっている

でも気持ちだけでもルナと一緒に戦いたい

エル「リヨウさん：」

エルンストさんはジツとボクを見つめていたが

その瞳にはボク以外の誰かが映っているように見えた

ルナ「：エリックも似たような事を言つて

極東に行ったんでしたね：」

それまで黙つてボクを見つめていたルナが口を開いた

ルナ「少し違うかも知れませんが

ワタシは今、エルンストさんと同じ気持ちだと思います

エリックが極東へ赴いた時の、貴方と」

エルンストさんは目を伏せて黙っている

ルナ「正直に言えば、リヨウをG O D E A T E Rにしたくない

でも、ワタシ自身もG O D E A T E Rですから

リヨウの気持ちも分かる気がするんです」

目を閉じて、静かに息を吐き出すルナ

ルナ「エルンストさんのご好意は非常に嬉しく思います

状況によっては願ってもない話だとも」

ですが、と閉じていた瞳を開き

ルナ「ワタシはこの娘の姉として

ただ守るだけではないけないのだと知りました

ワタシはリヨウの意志を尊重します

そして誇りに思います」

深く頭を下げる彼女に合わせてボクも頭を下げる

ルナ「お気持ちを無碍にして申し訳ありません

そしてワタシ達を心から思って下さって

本当にありがとうございます」

ルナの言葉に続いてボクは

真っ直ぐエルンストさんを見つめ言葉を続けた

リヨウ「代わり…という訳じゃありませんが

1つだけお約束します」

エルンストさんは伏せていた目をこちらに向ける

リヨウ「必ず、生きて戻ります」

ボクの言葉にエルンストさんは静かに涙を流した

エル「…絶対だよ？」

そして、忘れないでくれ

君たちは2人きりではない

帰りを待っている人達が居るんだ」

リヨウ「はい、絶対に…！」

## 5話

エル「すまないね…

歳を取るとどうしても心配事が増えてしまって  
若い娘達に恥ずかしい姿を見せてしまった」

リヨウ「いえそんなことないです

その…心配して貰えるってちよつと贅沢ですが  
ボクは嬉しかったです」

懐かしいというか

お父さんが生きていたらこんな感じなんだろうなって  
そう思うとエルンストさんに失礼かもしれないが  
やっぱりちよつと嬉しかった

エル「何か困ったことが有ればいつでも言いなさい  
私に出来る限り、力になろう」

そう言つてにこやかに手を差し出してくれた  
その手をとって握手をしていると

ルナ「でしたら、早速で申し訳ないのですが  
一つお願い事があるのです」

と、ルナがやや硬い表情で言う  
え、珍しい…

普段、泰然自若という言葉が良く似合うルナが  
そんな表情を見せたこともそうだが

あまり誰かに頼み事をしない  
貸しを作るのは好きだが借りを作るのは嫌い

と公言している彼女が素直に頼るなんて…  
何か天変地異の前触れでは…？

とか、考えているボクの手を  
そつと離れたエルンストさんが

エル「珍しいな、ルナ嬢が…」

と同じことを口にしていた

エル「ひとまず言ってみなさい  
私に出来ることなら喜んで力を貸そう」  
エルンストさんってやっぱり男前だなア  
とか思いつつ、真面目な話だと感じたので  
席を立とうとしていると  
そつとルナに手で制される  
なんだろう？

長話が続いてすっかり紅茶も冷めてしまっているので  
ついでに淹れ直して来ようかと思つたが  
ルナ「アナタの話だから」

と有無を言わさぬ口調で短く告げられ大人しく座り直す  
エル「リヨウさんの？」

エルンストさんも真面目な表情だ

ルナ「午前中、本部に呼ばれましたね

極東行きの話だと思つていたのですが：  
少し事情が変わつたようで」

一旦、口を閉じ言葉を選ぶように再度ゆっくりと話始めた  
ルナ「任務内容については機密も含まれるので

詳細をお話することは出来ないのですが  
端的に言つて、私の極東行きは少し遅くなりそうなのです」  
そこからざっくり説明された話では

本来、G O D E A T E R が転属や出張をする場合  
あらかじめ、現地に神機を送り

本人は後からその場に向かうことが多い  
今回の極東行きも当初はこれまで通りの予定だったそうだが  
つい昨日、極東支部の道中にあるいくつかの支部から  
応援要請があつたという

しかしその要請に割ける人員が足りない  
だが、極東への転属も急ぐ必要がある  
そこで本部は苦肉の策として

極東支部に転属予定のルナを含むメンバーに

神機と共に各支部を経由しながら

極東に向かうようにと今朝、命令が下ったという

ルナ「珍しく決断が早…いえ失礼

状況を鑑みれば間違っていない指示ですし

本来の予定から遅れはしますが

解決策としては妥当な判断です」

一瞬、不穏な発言をしていたように思ったが

エルンストさんは小さな苦笑いを浮かべただけで

聞かなかったことにしてくれている

ルナ「それで、今朝の指令の後に伺ったのですが

エルンストさんも近く極東に出向かれるとか？」

エル「ああ、仕事と私事を同時に…ね

それがどうかしたのかい？」

ルナ「本来ならワタシがやるべき事なのですが…」

本当に珍しい日だな

ルナがこんなにも申し訳なさそうに頭を下げるのは

中々見られない光景だ

とか思いながら、ルナを眺めていると

チラリと目が合った

ルナ「リヨウと一緒に連れて行って頂けませんか…？」

あ、ここでボクの話？

エル「なるほど…それは構わないが

ルナ嬢が極東に到着するまでは大丈夫かね？」

私も長くは滞在出来ない、2〜3日以内にはこちらに戻るが

あ、いや向こうの別宅があるからそこで良いなら…」

エルンストさんはボクが1人になるのを懸念しているらしい

ルナ「いえ、そこまでして頂かなくても大丈夫です

本部を通して極東へ先に通達して貰えるようにしてますし

極東に着きさえすればリヨウが暮らす準備も出来ているはず

一応、向こうにいる旧友にもメールを送りますので

リヨウの世話までは何とかかります」

流石と言うべきか、ルナは先読みというか  
備えあれば憂いなしを信条としている

今回も割りとは急なアクシデントにも関わらず  
打てるだけの手は打っている

リヨウ「それに住める場所さえあれば

ボクは大丈夫ですよ」

何度も言うがボクはもう13歳だ

それなりに自炊も出来るし家事はこなせる

ルナが出張していた頃はほとんど1人暮らし同然だったし

今回はそれに比べて随分楽だとすら思う

むしろ…

リヨウ「極東に向かう移動手段さえあれば

ボク1人でも大丈夫…」

ルナ「ダメ」

言い切る前にキツパリ短く却下された…なんでだ

エル「そうだね…安全性で言うなら

私と一緒にの方が間違いないだろう

流石はルナ嬢、相変わらずの慧眼だ」

エルンストさんは小さく拍手している

釈然としないけど2人の口振りから

どうやらボク自身の心配をしている訳ではないと感じ

ひとまず納得することにした

エル「それで…私の予定では4日後に出立することになるが

向こうに着いてから一度別宅に寄るから

極東支部には5日後に入ることになるかな」

ルナ「構いません、むしろ先の予定とあまり変わりませんし…」

うん、それくらいなら準備も間に合うし

リヨウ「ルナは？いつ出るの？」

ふと気になったので尋ねてみたら

突然、抱き締められた

ちよっ離せ！

ルナ「2日後には出発なの…」  
あー…やつと分かった  
なんでこんな珍しいルナが見れるか  
というか出張していた頃は割りと良くあつた現象だ  
半泣きでボクを抱き締める彼女を引き剥がすのは  
ひとまず諦め、よしよしと頭を撫でてあげる  
そう言えばそうだった、この女は<sup>シスコン</sup>  
急なアクシデントのせいでボクと一緒に過ごせる時間が  
無くなつて荒れていたのだ

その後、簡単に打ち合わせた後  
改めて淹れ直した紅茶を3人で楽しみ  
エルンストさんは仕事の都合でお帰りに  
ボク達は少し遅くなつたが予定通りに買い物に出掛ける事にした  
リヨウ「ひとまず必要なのは…」  
ルナ「下着ですね」  
大丈夫、安心して下さい…！  
お姉さんが腕によりをかけて選びますから!!」  
リヨウ「要らんって言ってるでしょうがっ！」  
今日もボクのグーパンチはキレキレで  
ルナは絶望に打ちひしがれた顔をしていたが  
この女を<sup>ズ</sup>甘やかすとロクなことが無いので  
ひとまず雑貨屋さんに引きずって行った

ボクは楽しみは最後に取っておくタイプだからね

## 6話

先に出立したルナを追いかけられるように機上の人となった道中は特に問題なく、予定通り極東に到着し

今日はフォーゲルバイデ家の別宅に泊まる事になった

エルンストさんが娘を紹介したいと言ったことと

支部入りは明日なのでボクはお言葉に甘えることにした

エリナ「初めまして、

エリナ・デア・フォーゲルバイデです」

幼いながらも財閥令嬢として礼儀作法はバツチりらしい

リヨウ「加賀美 リヨウです」

エリナ「ええ、知っているわ！

ルナの妹なんでしょう？」

先程の丁寧な口振りから一転、明るい声音

11歳という年齢相応の爛漫さが垣間見える彼女は

ニコニコと花の咲くような笑顔で話してくれた

エリナ「本部に行つてからは中々会えてないけど

よくエリックを通してお手紙をくれるの！」

なるほど、と頷きながら

出立前にルナから預かっていた便箋を取り出すと

一際嬉しそうな笑顔を見せ

早速、封を切るエリナを眺めながら

エル「相変わらずルナ嬢はママだね」

と、にこやかなエルンストさんと共に

メイドさんが用意してくれた紅茶を啜る

会う前に聞いた話によると

病気がちな彼女は療養の為に

欧州よりは空気の良い極東で暮らしているそうだが

今日は元気そうで何よりだなと思つてしていると

エリナ「リヨウの事も書いてあるわ！

それとこっちはお父様宛てみたい」

と、もう読み終えたらしく

いそいそとボクの隣にやってくるエリナちゃん  
エル「おや、私にも？」

首を傾げるエルンストさんに

同封されていたもう一通を差し出したエリナは  
先程から大切そうに両手で広げた便箋を掲げた  
どうやら読み聞かせてくれるらしい

『拝啓、私の可愛いエリナちゃん

最近はいかがお過ごしでしょうか？

こうして筆を取る度に、4年前

寂しそうながら笑顔で見送ってくれた姿を思い出します  
そちらに居るであろうお父様か

エリナちゃんと同じくらい可愛い私の妹、リョウから

もう聞いたかも知れませんが

近いうちに極東に赴くことになり

必ず迎えに行くという約束を

ようやく果たすことが出来そうで

お姉さんはとても嬉しいです

あの頃から成長したのであろうエリナちゃんを

この目と身体で感じる事が出来ると思うと

道中に蔓延るアラガミなんてへっちやらなくらいです

一刻も早く、最愛の2人と睦まじく暮らす為に

お姉さんは頑張りますから

エリナちゃんとリョウは一足先に

仲良くしてくれてくれるといいな

待っていて下さい、今、逢い<sup>愛</sup>に行きます

2人の妹をこよなく愛する姉、ルナより』

いや、ラブレターか？

以前口リコンが云々言っていたが

お前のがよっぽど恐ろしいわ！

内心、全力で突っ込むボクの様子も気付かず  
エリナ「ルナってお茶目よね！」

大袈裟だけど気に掛けてくれてるのが分かるし良いお姉さんよね  
リヨウとも仲良く出来そうで嬉しいわ」

と、楽しそうなエリナちゃんはどうかそのまま居て欲しい  
思わずつきたくなるため息を堪えて居ると

目の前でエルンストさんが先程受け取っていた別紙を  
幾重にも丁寧に破り後ろにばらまいていた

エリナ「お父様、エリックと同じことしてる…」

さながら桜吹雪のような光景を眺めているボク達に

エル「読み終わったらそうしてくれと書いてあるからね」

と、満面の笑顔で告げるエルンストさん

その声に籠もる妙な凄みに身体が硬くなる

エル「ところでリヨウさんに頼みたいことが出来たんだが

ウチの娘は絶対にやらない、と

ルナ嬢に一言一句違わず伝えて貰えるかな？」

穏やかな表情だが明らかにお怒りの様子に

思わず冷や汗を浮かべながら頷き

リヨウ「必ずお伝えします…」

ところで、さっきの…」

少し声を潜めて尋ねると、エルンストさんも同じく

エリナちゃんに聞こえないように

エル「…養子縁組の書類だったよ…」

それを聞いたボクは

今度、あの姉の顔をグーパーパンチすると心に誓った

---

ルナ「ハクチュツ…!!」

西欧の一地方

かつてはそれなりに栄えた街も今は廃墟と瓦礫の山  
その中心に近いやや拓けた場で

先程、討伐し終えた蠍ホルグ・カムランのような大型を眺めていたら

大きくくしゃみが出てしまった

埃っぽいからかなあ…と思いつつ

ルナ「或いはリヨウかしら…？」

なんて巫山戯ても単独任務だから応えてくれるものは無い

しかし大型とは言えこの程度で救援…？

なんて呆れそうになるのは

ワタシが激戦区極東出身だからか

各支部のレベルが落ちてきているのか

それとも裏に後ろめたい一物を抱えたあの男の差し金か

本部で予定の変更指示を受けた時

愚鈍な本部にしては早いなど皮肉を思い浮かべ

いざ、相対した任務の呆気なさ

そして最後に経由するのがロシアという事が

嫌に思考を働かさせてくれる

なまじ要らない事を抱えさせられてきたワタシには

引つかかる点が多過ぎて

出立前から色々と憂鬱な気持ちだったので

リヨウに甘えたり、エルンストさんにイタズラを仕込んだり

気晴らしから出発して来た

さっきのくしゃみはそのお陰かも知れない

なんてくだらない事を考えながら

手に持つまだ真新しい神器を無造作に後ろに向けて振るう

背後から飛びかかってきたオウガテイルの雑魚の

大きく口を開いたままの頭だけが前方に落ち

背後ではドサツと何やら重たい音がした

ルナ「調子は悪くない…」

確認するように呟く

この半年程、色々と調整して来た成果か

それとも適合率の高さゆえか

この、慣れてないけど馴染む感覚に

恐らく後者だろうなとやや感心する

以前の形状から大きく変わった得物を

しげしげと眺めるワタシを囲むように

次々と姿を現すオウガテイルの群れ

ルナ「食い意地がはつてるのねえ…」

ポ  
ル  
グ  
・  
カ  
ム  
ラ  
ン目の前の死骸に寄せられて来たのだろう

コイツらは単純で人間よりも好感が持てる

だが、容赦はしない

先程のように飛びかかってきた1体を潜るように一閃

脚と胴体を両断されたそいつには目もくれず

身体を軸に先程の勢いを活かして振り回す

狙い通り側頭部に刃を突き立てながら

コマのようにグルリと回転し捕食形態に変形させる

回転の勢いで刃から飛ばした1体とぶつかり体勢を崩した1体

2体纏めて神器を喰らいつかせた瞬間に感じる高揚感ハイ  
ス  
トに

思わず漏れる吐息が口元を歪に緩ませてくれる

ルナ「まるで死神ね…」

今の姿は、リヨウ達には見せたくないな

無垢で綺麗なあの娘達には出来ればそのまま置いて欲しい

その為に、ワタシが汚れるのは構わない

目の前のアラガミも、上で色々五月蠅い奴らも

まとめて薙ぎ払いたい衝動のままワタシは身体を躍らせる

さながら、マリオ操  
リ  
人ネット形のダンスのように

ワタシは戦い続けた

## 7話

現在、最もアラガミの活動が盛んな極東

歴戦の猛者と呼べる精鋭の集うここ、アナグラで

出迎えてくれたのは臙げな記憶にあった女性だった

ツバキ「加賀美 リヨウだな？」

私は雨宮 ツバキ、階級は三佐だ

まだGOD EATERでは無いお前とは直接関係ないが

この支部のGOD EATERを纏めている

お前の将来に備え、訓練を施すように

お前の姉からも頼まれている

中々、時間が取れないかもしれないが

引き受けた以上は厳しく躡てやる

つまらないことで死にたくなければ

私の命令には全てYesで答えろ、いいな？」

ハキハキとした口調で告げられ

まずは部屋に案内するから着いてこいと踵を返す

凛々しい雰囲気彼女の彼女を慌てて追いかけ

エレベーターに乗り込んだ

ツバキ「…大きくなつたな」

小さく呟く声

大きく響く稼働音の中では聞き取り辛かったが

ボクは、過去のお礼を述べた

リヨウ「あの時は、ありがとうございました

これから頑張るのでご指導の程よろしくお願いします！」

言い終えて決意と共に下げた頭に

優しく添えられた手

ツバキ「…私は特に何もしていないが

せっかくなか拾えた命だ、大事にしろ」

先程の厳格な雰囲気から

静かな優しい言葉

微かな懐かしさを覚えながら

到着した階層に足を踏み出すと

既にツバキさんはキビキビとした雰囲気になっていた

ツバキ「ここがお前の部屋だ

隣がお前の姉の部屋、向かいは私の部屋で

反対隣が橘の部屋だが：橘は覚えているか？」

ルナからボクの記憶について聞いているのか

少しだけ探るように尋ねられた

辛うじて思い出せたので頷く

橘 サクヤさん、確かあの頃はオペレーターをしていた方だ

ツバキ「そうか：皆忙しいが

ルナが居ない間、何か困ったことがあれば

私か橘に声をかけろ」

表情は厳格なままだが言葉は優しい

だが、すぐにハキハキとした口調に戻り

ツバキ「ひとまず、手荷物を置いて

筆記用具の類だけ持って来い

今後、お前の教育を手伝ってくれる方の所に連れて行く」

はい！っと元気に答えて急いで支度をする

手荷物から必要な物だけを取り分けて部屋を出ると

ツバキさんは廊下の奥を睨みつけていた

ツバキ「リンドウ：何をしている？」

ツバキさんのやや恐ろしい雰囲気には圧されかけていると

彼女の視線の先から男性の方がやってきた

アレ？この人：

リンドウ「いやいや、姉上

報告書を纏める前にちよつと飲み物を：と思ひまして」

ツバキ「ほう：では今日は早くに提出出来るのだな？」

威圧的な笑顔のツバキさんと苦笑い混じりに頭をポリポリ搔く男

リヨウ「リンドウさん…！」

ハツキリと記憶に浮かぶ人物に思わず声を掛けると

彼は少しだけ安心したような笑みを浮かべ

リンドウ「おう、久しぶりだな

あの時の約束もちゃんと覚えてるか？」

そう言って昔のように頭をやや強く撫でられる

思い出すのは、助けられた後

ルナと共に極東を立つ時にかけられた言葉

リヨウ「死ぬな、死にそうになつたら逃げろ、そして隠れろ」

忘れる訳が無い約束をしっかりと口に出す

リンドウさんとツバキさんは優しい笑みを浮かべ頷く

リンドウ「今はまだそれだけを覚えておけ

お前さんが晴れてGOD EATERになった時は

約束じゃなくて命令として守ってくれ

4つめは、その時まで取っておく」

リヨウ「はい!!」

リンドウさんと別れツバキさんに伴われて来たのは

ラボラトリと呼ばれる区画の1番奥の部屋

榊「やあやあ、待っていたよ！」

私はペイラー・榊、博士と呼んでくれたまえ

フェンリル極東支部アラガミ技術開発統括責任者と

GOD EATER達の座学教官も務めている

キミの座学もこれから担当するからよろしく頼むね」

狐のように細い目を更に笑顔で細めながら

親しげに握手を求める博士

到着初日から、しかも上役の方から講義を聞けるなんて

緊張半分・張り切り半分なボクに

しつかり励めよ、と言葉を残し去るツバキさん

榊「少し待っていてくれ

今日、一緒に講義を受ける人達が来るから

「適当にくつろいでいてくれたまえ」

「こやかな博士に促され

ソファの端っこに腰掛けること数分

？」「失礼します」

声を揃えて入室して来たのは

ボクよりは少し年上に見えるが

明らかに若い少年少女の3人組

？」「アレ？博士ー、この子誰ですか？」

榊「やあ来たね、第1部隊のみんな！」

先と変わらぬやや大袈裟な振る舞いで

彼らを出迎えた博士はそのままチラリとボクを見た

多分、自己紹介しろってことだよね？

糸目って分かりにくいなとか思いながら姿勢を直し

リヨウ「今日から榊博士にご指導賜ることになりました

加賀美 リヨウと言います」

先の博士の言葉にあつた、第1部隊

まだG O D E A T E Rでないボクでも知ってる

極東支部の第1部隊と言えば恩人であるリンドウさんを筆頭に

数あるフェンリル支部の部隊の中でもエース格

精鋭部隊と言えるエリートが集まりだ

リヨウ「未熟者ですが

先輩方のご迷惑にならないように頑張りますので

よろしく願います！」

まさか、こんなに若い人達だったなんてと驚き半分

緊張の余り普段以上に丁寧な言葉を使いながら

ややぎこちなく頭を下げる

コウタ「へえー見たとこオレらよりも年下っぽいけど

しっかりしてんじゃん？

オレ、藤木 コウタ！よろしく！」

と活発そうな声音の黄色いニット帽を被った少年が

真っ先に手を差し出してくれたので握り返す

ユウ「はじめまして、神薙 ユウです  
一緒に頑張ろうね」

続けて穏やかな声色でにっこり微笑みながら  
両手を差し出して来たのは

フェンリル指定の制服を着こなしたロングヘアの少女  
親しみやすそうな人で良かったと思ったのも束の間  
アリサ「アリサ・イリーニチナ・アミエーラです」

簡潔に言い終えてスタスタと反対側のソファに向かう  
赤いチェックの帽子とスカートが特徴的な

白い髪色をした彼女はやや気難しい人なんだと思った

榊「さて、自己紹介も済んだ所で

早速今日の講義を始めようか」

タイミングよく切り出す博士の言葉に

それぞれソファに座る

端から、コウタさん・ユウさん・ボクが同じテーブルに着き

1つ離れたテーブルではアリサさんが既に博士を見つめていた

榊「今日の講義は初めましてのリョウくんに因んで

近々、新たに配属されることになった

新型神機についての話だ」

ボクに因んで？と首を傾げながら

新型神機と言えどどちらの話だろうと考えていると

博士はやや苦笑気味にこちらを見据えつつ

榊「新型と言うとユウくんやアリサくんにとって紛らわしいね

正式な名称はまだ決まっていないので

ここでは仮に新形状神機としよう」

その言葉に本部を立つ少し前に

家庭教師から教わった授業を思い出しつつ納得した

現在、一般的に使用されている神機は

刀剣から派生した3種類の近接型と

銃器をベースに発展した3種類の遠距離型の

大きく分けて2種類だ

この2種を組み合わせ遠近両用に対応した新型が開発され  
数少ない適合者が極東に配属されたと言う話はボクも知っていた  
チラリとアリサさん、続けてユウさんに目をやる

榊「先に配備された新型に続き

今度も新たに新形状神機を伴った部隊が

本部から派遣されることになっているんだが：

何を隠そうその1人がここに居るリョウくんの姉君だ」

なるほど、そういうことだったのか

極東に移転する前の約半年強

任務自体は時折あったし、何かと忙しそうだった割りに

本部から離れる仕事が極端に減っていた姉<sup>ルナ</sup>

次いで、極東に立つ前の最後の授業で

近い内にビツクリするだろう

と笑っていた家庭教師<sup>ダミアン</sup>の姿を思い出し

ようやく合点がいった

榊「その様子だと事前に知識は持っているようだね？

では、リョウくんに少し説明してもらおうかな」

少しばかりイタズラっぽい口調で促され

ボクは慌てて家庭教師の最後の授業を辿り

口に出す作業を始めた

## 8話

リョウが一生懸命に新形状神機について語っている  
同時刻のロシアでは件の部隊が会話を楽しんでいた  
？「2人のソレはなんていうか…思ったより機敏？」  
と、やや感心したように話す男に合わせ

手に持つ神機を軽く持ち上げながら答える2人の男性  
？「まあ、僕のは軽いからな

機動力は以前使ってたのより高いと思うぜ」

？「自分のは見た目通りの重量ではあるけど  
使い次第では確かに軽やかにも動けんで」

最初に声を上げた男、タバサ・シンロツクは  
興味深そうな口調でしきりに頷いている

タバサ「チャージスピアとブーストハンマー…か

最初は何となく前のショートやバスターに似た運用かと思っただけ  
ど」

と言うタバサの言葉に先に応えたのは

槍状の神機を携えた、リマ・ホークアイ  
リマ「確かに機動力を活かすって意味と

刺突を組み込む戦い方は前に似てるな

ま、こっちのが刺突特化だし

チャージの使い方より…なんて言うんだ？  
こう…上下左右みたいなの…あるじゃんか」

若干おどけた口調で言い淀むリマの後を次いで  
？「立体的な動き…って言いたいん？」

独特な口調の彼、イーガン・カートレインの助け舟に  
そうそう、それぞれ！と軽い口調のリマは頷く

眉目秀麗な見た目の彼は実はおちゃらけた言動が多い  
いつもの軽い調子を気にも留めず

大槌状の神機を軽く叩きながらイーガンが続ける

イーガン「自分も破壊力と言うか1発の威力の高さは  
バスター使<sup>て</sup>た時と変わらんで？

ブーストのお陰か前より振り回し易くなってるけど  
ちと、クセがあるからなあ」

タバサ「なるほどなあ：

形状が代わっても立ち回りの基本は

やっぱり前のに通じるものがあるのか…」

2人の話にしきりに頷くタバサは

手に持つ銃型神機に視線を落としながら

タバサ「おれなんて前のスナイパーと真逆だからなあ…」

やや、肩を落とす彼にイーガンは苦笑い混じりに答える

イーガン「いや、言うてバサ兄さん

今日めつちや笑<sup>わろ</sup>てましたやん？」

イーガンの視線の先には

獅子と虎を足したような見た目のアラガミ<sup>ヴァージュラ</sup>

だつたものが転がっている

リマ「思いつきり顔面にブツ放してたよな」

手に持つ槍でつんつんと指したそれは

見るも無惨に破壊された頭部だ

タバサ「いや、まあ綺麗に決まってビックリしただけ

ショットガンだからな、射程が短い分

しつかり撃てば威力は絶大だけど

まだまだ立ち回りは身につかないよ

それにやらかしてたのは2人もだろ？」

落ち着いた様子ながらややわざとらしく肩を竦めるタバサ

寡黙で冷静な雰囲気の彼だが

実は割りとはつちやけるタイプだったりする

リマ「いや、楽しかったし…」

イーガン「まあ、やっぱ戦つとるとなあ…」

わざとらしくそっぽを向くそれぞれの視線の先には

先と同じく酷い有様の死骸がそれぞれ1体ずつ

片方は頭頂から口腔にかけて綺麗に風穴が開いており  
一方は頭部がひしやげ平たい形になっている

タバサ「：まあ、ルナに比べればおれ達はマシだろ」

リマ「違えねえ」

イーガン「せやな」

嘆息混じりの3人が揃って見やった先には

頭部・前脚・後脚を綺麗に胴体から切り離された2体と

それらから核コアを抜き取り振り返ったルナ

ルナ「終わったよ」

手に持つ大鎌を血振るいするように払い

自然な動きで神機にもたれ掛かる彼女は

3人の話を聞いていなかったらしい

リマ「後処理お疲れ」

ルナ「ん、それで何の話？」

ロシアからの緊急応援要請

内容は今しがたルナが処理し終えた

ヴァジュラ5頭の群れの討伐だった

アラガミが死なない：と言うより死にくいのは

その生態上、核と呼ばれる部位を抜き取らない限り

活動を停止しないからだ

十分に弱らせ、戦闘不能に追い込み、核を抜き取ってから

ようやく討伐終了となる

基本的に複数人で討伐した際

最後に核を抜き取る作業は隊長格の仕事であり

つまり、彼らの中ではルナがリーダーと言える位置にある

本部に転属して4年余り、共に仕事をする事の多かった面子だ

今回、神機の交換・及び出張するに辺り

同行するメンバーが比較的、気心の知れた仲であったのは

ルナにとっては多少有難かった

その証拠：と言う程でもないがルナにしては珍しい

ラフな口調で話す姿は実はリヨウでも余り見ない

ルナ「何か失礼なこと言っただけでなかった？」

聞こえていなかったし意識もしていなかった

それでも何となく察する勘の良さは

彼女の美点であり欠点でもあり

周りにとつては脅威でもある

イーガン「いやちやうちやう！」

ほら、自分らみんな新しい神機やん？

戦い方とか武器毎の特徴とか：そういう話でな

ルナの神機はどうやろなあ：って」

こういう時、大体言い訳やら誤魔化しをするのは

イーガンの役目だった

独特な訛りが混じる口調とは裏腹に

生真面目な彼はこのメンバー内では貧乏クジな役回りが多い

ルナ「ふうん？」

ワタシのは前とあんまり変わらないけど：

斬撃主体で立ち回りも幅広いし

ロングに比べればリーチが広くなったのが利点で

その分、たまに重いくらいかしら？

慣れてきたら全然気にならないけど」

だろうな：と心の中で突っ込む3人

元々、ルナは多彩な立ち回りでアラガミを翻弄するのが得意だ

極<sup>激</sup>東<sup>戦</sup>出身であるが故か

元々のポテンシャルが高いのかは分からないが

臨機応変な動きで安定して優勢を保つ戦い方

彼女が本部所属でありながら

単独任務や他支部への応援・出張、その他諸々の

幅広い仕事を任される所以である

以前、リヨウにこぼした本部所属の便利屋は

実はルナにだけしか当てはまらないことをリヨウは知らない

ルナ「それより早く戻りましょう？」

いい加減、華の無い光景は飽きました：

ラフな口調から一転、いつもの丁寧な口振りで  
やや落ち込んだような様子のルナは

気だるげに帰投準備に入る

リマ「悪かったな、男所帯で」

タバサ「相変わらず、任務が終わるとコレか…」

イーガン「ほんま、ブレへんな」

三者三様、苦笑混じりに帰投準備を始めたその頃

極東ではリヨウがようやく説明を終え

奇しくも彼らが話していた内容そのままだったこと

そして

ルナ「(緊急性の高い任務ではありましたが

今のロシア支部では対処し切れないのも仕方ない

でも…何か…嫌な予感がします

まさか、リヨウに男が…！早く極東に向かわなくては！」

真面目なのか巫山戯ているのか

残念ながら全外的外れではあるが

彼女の嫌な予感が的中する事をルナはまだ知らない

その勘の良さは美点であり欠点でもあり

周りにとつて脅威でもあるが

彼女をルナLunatic足らしめる所以なのだ

## 9話

コウタ「あー…疲れた…」

リヨウ「いや、寝てたじゃん」

榊博士の座学も終わり

ボクと第1部隊の3人はラボトリの廊下を歩いていた  
あくび混じりに呟くコウタに思わずジト目で突っ込むボク  
榊博士にいきなり前に立たされ

新形状神機の種類を話し出した時点で船を漕ぎ

ひとまず最初に思い出したチャージスピアの説明中には  
完全に寝入っていたコウタに

いつの間にか敬語が外れてしまうのも仕方ないと思う  
いきなりの出来事に緊張し

言葉に詰まりながらだったとは言え

博士には褒められたし

ユウさんやアリサさんには

分かりやすかったとお礼を言われたが…

若干尖る唇をそのままにコウタを見つめていると

彼は気を取り直すように声を上げた

コウタ「それよりさ！」

この後は特に任務とか無いからさ

ちよつと早いけど一緒に夕飯にしね？」

ユウ「あ、良いね

加賀美さんとお話したかったし

アリサちゃんは？」

仕方ないな、と言いたげな笑みと共に

最初に同意したユウさんは小首を傾げつつ

アリサさんを見る

アリサ「私は結構です、自主勉強したいので」

アリサさんはすげなく断りつつ

エレベーターの方を振り返る

うん、真面目な人だなあとか思ってる

やや慌てた様子でコウタが止めに入る

コウタ「いや、ちよつと待ってよ！」

アリサの歓迎会みたいなのもついでにしたいしさ」

どうやら、アリサさんも極東に来たのは最近らしい

アリサ「そういうの要りませんから

意識が低過ぎませんか？」

やや冷たい口調でバツサリ切り捨てるがコウタも譲らない

コウタ「任務や訓練のない時くらい良いだろ？」

チームで飯食うのもGOD EATERの仕事だし

それに、女の子がユウ1人じゃ可哀想じゃん？」

ん？

ユウ「え…？」

アリサ「それがどうかしたんですか？」

別に私には関係ない話ですし」

アレレ？

ユウ「ちよつ…」

なんか聞き間違えたのかな？って首を傾げるボクと

話についていけずオロオロしてるユウさんを後目に

ヒートアップする2人の口論

とりあえず右手をグーに握りしめ振りかぶろうとした時

ツバキ「なんの騒ぎだ!!」

ちようど、エレベーターから降りてきた

ツバキさんの一喝でかろうじて踏みとどまったボクと

ピタリと口論を止めた2人

カツカツとヒールの音を響かせながら

歩み寄るツバキさんと

その後ろ、呆れたように額に手をやる

ショートボブの女性、サクヤさんがいた

先にツバキさんに聞かれた時は

まだうる覚えだった容姿も

今、姿を見たことでハッキリ思い出せた  
ついでにあの頃よりも明らかに大きく成長した部位を見つめ  
思わず自分のソレへと目を落とした

いつかボクも大きく…なんかちよつと視界がボヤけた気がした  
少しシヨボンとしたボクの頭を優しくポンポンと叩きながら  
若干、虚ろな目をしているユウさんと2人見つめ合う横で

ツバキさんに促され事情を説明し出すコウタ  
アリサさんも若干気まずそうに首を竦めていた

コウタ「だから…その…」

講義も終わったしこっちに來たばっかの

加賀美とアリサを歓迎しようと思つて…

夕食に行こうつて話をして…」

アリサ「私は断つたんですけどコウタがしつこくて…

男女2人ずつの方が雰囲気が良いとかなんとか…」

ツバキ「貴様ら、そんなことで口論を…？」

それに…男女2人ずつとはどういう意味だ？」

呆れたような口調で問うツバキさんに

2人はキョトンと首を傾げ揃つてボクを見た

改めて拳を握りしめ振りかぶるボクを

その控え目な胸を押し付けるように留めるユウさん

2人の視線を追つてこちらを見て

更に呆れたような溜め息を零すツバキさんとサクヤさん

ツバキ「念の為にもう一度聞くが誰が男だと？」

コウタ& a m p ;アリサ「加賀美(さん)のことですけど…」

よし殴ろう、と拳を震わせるボクを

更にギユツと抱き締めるユウさん

そんなボクらを横目にツバキさんは告げる

ツバキ「お前達…リョウは女の子だ」

え？と目を点にしてボクを見つめる2人に

精一杯につこり笑つて見つめ返す

コウタ「え：いやだつて胸が：」

言いやがったな？このイエローモンキーがあ!!

抱き締めるユウさんを振りほどかんばかりに暴れるボクを  
今まで静観していたサクヤさんが押し留める

あ、柔らかか：えっ凄お：

ユウさんごと抱き締められて

その脅威胸固的な柔らかさに思わず固まるボク

ツバキ「：ひとまず、元気が有り余っている2人は

特別に私自らがしごいてやろう、有難く思え」

無情なセリフに逆らうことも出来ない2人は

女性が持つ魅力に溺れるボクを置いて

訓練所に連れて行かれたのであった